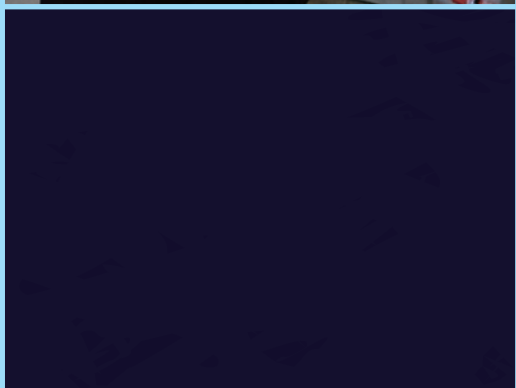
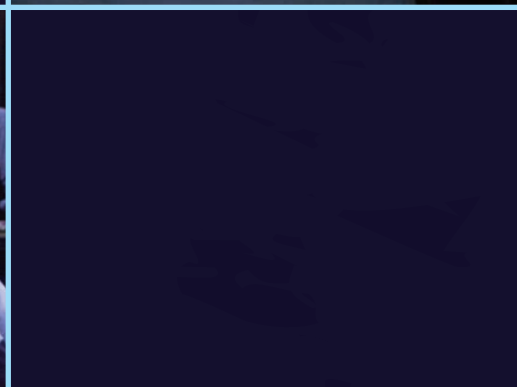
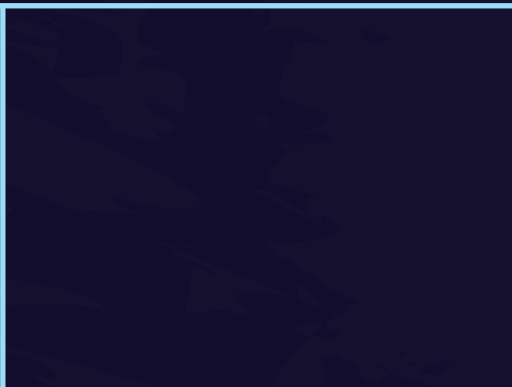


NPO 法人ピースビルダーズ

「パレスチナ教育支援事業 ― Yes 4 Future ―」

(外務省 NGO 連携無償資金協力事業・ヘブロン青少年の心理的ケアのための教育的市民社会ネットワーク拡充事業)



パレスチナ教育支援事業とは

ピースビルダーズ（PB）は平和をつくる人々「ピースビルダーズ」を支援する団体として、設立以来活動してきました。そして今回はじめて、紛争によって長い間不安定な状況下にある中東・パレスチナでの教育支援事業を開始しました。

「ヘブロン青少年の心理的ケアのための教育的市民社会ネットワーク拡充事業」（通称：Yes 4 Future）

は現地の教員やソーシャルワーカーを主な対象とし、ドラマの手法を用いて、子供のストレスケアに対応できる地域づくり、人づくりを行う事業です。

平和をつくる活動では、紛争を解決するための政治的な働きかけと同時に、現在紛争下で困難に直面している人々をサポートしていくことも非常に重要です。この事業では、そんな人々の中でも、最も紛争の影響を受ける子どもたちのストレスケアに焦点をあて、彼らが安全に、自由な自己表現できる場の提供を目指します。PB はこの事業を通じて、将来パレスチナの平和をつくっていく子どもたちが、混迷する状況の中でも希望を失わず、自分の能力を信じて最大限のばしていけるよう支援していきます。



目次

パレスチナ教育支援事業とは	・・・ P1
事業内容	・・・ P2
代表者メッセージ	・・・ P3
ドラマ・エデュケーションとは？	・・・ P4
事業背景	・・・ P5
事業地ヘブロンについて	・・・ P6
ワークショップ・講師紹介	・・・ P7、P8
ドラマメソッド紹介	・・・ P9
実践フェーズ報告	・・・ P10
参加者の声	・・・ P11、P12
資料収集・今後の展望	・・・ P13
スタッフコメント	・・・ P14



事業内容

紛争地のような、いつ自分の生活が脅かされる出来事が起こってもおかしくない環境は、人々に大変なストレスを与えます。パレスチナ、イスラエルの混迷する政治状況は子どもたちにも容赦なく影響しています。パレスチナは 15 歳以下の人口が 42.5%を占める非常に若い社会であり、子どもたちの心理的な健康を守ることは、今後のパレスチナ社会にとって非常に重要です。ところが、パレスチナでは公立学校では教科書に沿った知識詰め込み型の教育が中心であり、心理面のサポートや、表現教育は軽視される傾向があります。

子どもたちが存分に自分を表現すること、様々な困難をクリエイティブに乗り越えていく能力をもつこと、そしてそれらに挑戦し将来を切り開いていく前向きな心をもつこと。

Yes 4 Future ではこれらの 3 点をキーに、子どもたちと接する教育者の能力向上に取り組んでいます。

心理ケアのツールとしてドラマ・エデュケーションを採用し、地元団体および現地教育当局の協力のもと学校の先生をはじめ現地教育者を対象にしたワークショップを開催しました。2012 年 12 月までの期間に 9 回 1 組のセッションを、対象者を変えて全 8 回開催しました。ドラマ・エデュケーションのワークショップでは、授業時間でも簡単に出来る 50 種以上のドラマ・ゲームを実際に体験しながら習得しました。また、子どもの権利・児童保護についてのレクチャーを通じ、教育者としての役割について理解を深めました。

ワークショップの後には実践フェーズとして、参加者が子どもたちとドラマ・ゲームを実施する機会が提供されました。講師からの実践に当たってのアドバイスを得ること、教育に携わる参加者同士がアイデアを共有することが目的です。

また、これらのワークショップ参加者が継続的に子どもたちの心理面のサポートや表現教育に取り組むための資料・マテリアルの収集も併せて行われました。これらは地域の教育者達に公開され、子どもたちの心理ケアの情報拠点となっています。

参加者からのアンケートでは、子どもとのコミュニケーションがスムーズになった、子どものケアに関する知識や手法を学ぶことができたなど、多くの人が日常の業務に活かせる意義を実感していることがわかりました。アンケートのほかにも、ワークショップ形式、ワールドカフェ形式など様々な形で参加者の意見を集めています。さらに、2 期目以降の事業プランニングに参加者も招待するなど、常に現地の具体的なニーズに沿った事業実施を目指しています。

この他にも専門家のアドバイスの提供、日本人劇団によるワークショップを通じた表現教育の多様性の提示など、実際の教育現場でより役立つ技術提供の取り組みがなされています。また、現地教育当局も含めた地元のネットワークを強めていくことによって、現地でドラマ手法を活用したストレスケアが根付き、教育現場が積極的にその役割を担っていく枠組みが作られています。

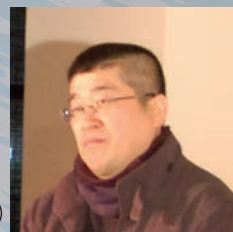


PB 代表者メッセージ

PB が活動のメインとしている「平和構築」には、政治、経済、教育など、様々な側面からアプローチがあります。PB は設立以来ルワンダやシエラレオネ、ボスニア・ヘルツェゴビナなど「紛争後」社会の支援を、主に人材育成を通じて行ってきました。PB にとって、本事業ははじめてパレスチナで行う事業であると同時に、はじめて「紛争中」の地域で行う事業でもあります。紛争中の地域、とくに問題が非常に長期化しているパレスチナにおいては、社会の不安定さや先行きの見えない閉そく感は一層深刻です。だからこそ、その中で育っていく子どもたちのストレスケアは非常に重要であり、そのノウハウを持った人材が求められています。厳しい政治状況を今すぐに変えることは難しくとも、本事業が、パレスチナの将来の平和をつくるための確実な一歩となることを目指します。

伊勢崎賢治

(PB 代表理事、東京外国語大学大学院教授)



カウンターパート：Yes Theatre メッセージ

一年が過ぎ、また新たな一年が始まります。Yes 4 Future プロジェクトが始まったのがまるで昨日のこのように思えてなりません。2012 年の終わりには、将来の協力の礎となる一年目のプロジェクトの完了を祝っていることでしょう。2012 年の間に Yes Theatre と PB はたくさんのワークショップと、子どものためのアクティビティを実施してきました。結果、110 名以上の男女教育者にこのプログラムを届けることが出来ました。これらは、コミュニティ構築の分野ではヘブロンで初めてである、日本とパレスチナの団体の協力による真の成果です。多くの気づきがあり、学びがあり、様々な提案もなされました。異なる姿で、似た目的と関心を持ったこの二つの国のために、多くの人とこの経験を共有し発展していくことを願っています。

ムハンマド・イサ

(Yes Theatre アドミニストレイティブ・マネジャー)



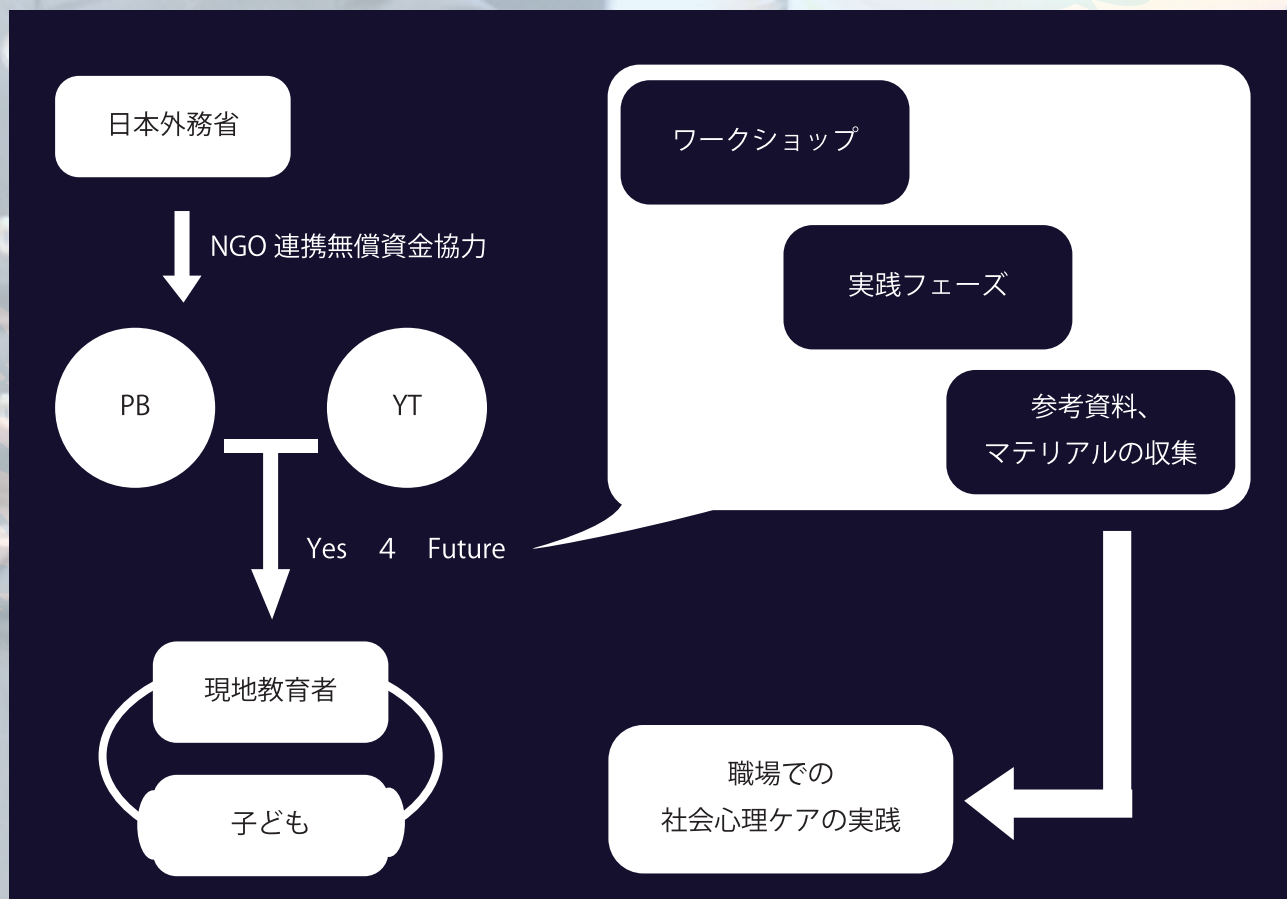
ドラマ・エデュケーション／セラピーとは？

あたえられた役柄を演じることで、さまざまな立場から物事を考えるロールプレイ、聞き手に伝えることを意識して自分のことや気持ちなどを話すストーリーテリング、即興などの演劇的手法を活用した教育／ストレスケアの方法です。

架空の設定をした非日常の空間で、普段とはちがう振る舞いをしたり、日常では表すことのできない感情をだすことで、心の安定や自己統合を図り、自分をコントロールすることを学びます。また、想像力をきたえ、共同作業によって他者との信頼関係構築やコミュニケーション能力を向上させることが出来ます。こうした演劇の特徴を活かした教育プログラム（ドラマ・エデュケーション）は欧米では数多く実践されています。



事業実施図



これまでのパレスチナに関わる事業

・啓発活動（2009 年～）

PB は、多くの人権侵害が報告されるパレスチナ問題をテーマに、2009 年以降、勉強会、講演会を多数実施してきました。ステレオタイプを超えて、アクチュアルな存在としてのパレスチナ人を知るためのアラブ詩のワークショップ、コミュニティ開発に取り組む地元の人材とスカイプでつなぐ講演会、中東理解促進のため東京外国語大学酒井啓子教授（当時）が取り組んだプロジェクト「中東カフェ」の広島招致などを行いました。

・パレスチナにスタッフを派遣した調査事業（2010 年）

パレスチナ問題への広島の人々の理解を深めるといった間接的支援を発展させ、直接的支援を展開する足掛かりとして、2010 年秋、スタッフをパレスチナに派遣し、「ヨルダン川西岸地区地方コミュニティにおける青少年のニーズアセスメントと演劇グループの実態調査」を行いました。

パレスチナ問題において、次の世代を担う若者の支援をする事は、将来に渡って安定した社会をつくるために非常に重要です。しかしパレスチナの若い世代は、移動、就労の不自由さや、政治的な不安定に人生を通して晒されてきており、状況に対する無力感や心理的なストレスが過激行動に刺激される要因にもなっています。パレスチナ自治区ヨルダン川西岸地区（主に南部）を訪問し、青少年支援としての表現教育の可能性について調査しました。（調査報告書は PB のウェブサイトでご覧いただけます。）

・今回の教育支援事業（2012 年）

調査事業によって、現地で活動する劇団「Yes Theatre」と協力できることがわかりました。調査の際にあがった「広いヘブロン行政区の中でストレスケアを必要とする子どもたちにいかに確実に支援をとどけるか」という課題への対策として、表現教育やドラマ・ワークショップを、日常的に子どもたちに接する教員やソーシャルワーカーを対象に行うことにしました。

これによって、ドラマ・エデュケーションや心理ケアの手法を習得した人材を育成し、彼らの関わる子どもたちに継続的にその成果を届けようというのが、この事業のねらいです。



事業地ヘブロンについて

PB は事業地ヘブロンを拠点に活動する唯一の日本人団体です。

ヘブロンはパレスチナのヨルダン川西岸地区最南部に位置します。14 の小行政区からなり、西岸地区最大の面積と人口を抱えています。宗教に関わる点では、旧約聖書に登場するアブラハム（イブラーヒム）の開いた土地であり、世界最古の都市の1つとしても知られています。アブラハムはキリスト教、イスラム教、ユダヤ教の始祖であるとされ、墓所のマクベラの洞窟は聖地として大切にされています。

近年急速に発展し、にぎわいを見せる新市街とは対照的に、アブラハムの時代から栄えた旧市街はイスラエルの入植地政策によって非常に衰退しています。ヘブロンには 1967 年の第三次中東戦争後すぐに建設がはじめられた「キリヤット・アルバ」を始め、たくさん入植地があります。これらの入植地は国際法上でも違法と考えられていますが、多くのイスラエル市民がそこでの生活を定着させているのが実情です。

ヘブロン旧市街は、入植地の住民とパレスチナ住民の衝突を避ける目的で 1994 年から封鎖されています。旧市街に住んでいた人々は移住を余儀なくされ、多くの商店が閉鎖されました。授業を続けている学校もありますが、子どもたちは毎日、兵士の待機するチェックポイントを通らねばなりません。旧市街にあるアブラハムの墓所を祀ったイブラヒームモスクへ行くにも荷物のチェックや ID の提示が求められます。こうした入植地にかかわる問題は、ヘブロンの住民にとって日常的な外的要因として存在しています。

またヘブロンの内部にも、伝統が重視される一方、新しい物事が受け入れられにくいこと、若者の能力を発揮し、自由に意見できる場所が少ないことなど、他地域に比べ保守的な傾向が強くあります。

この事業では、ドラマ・セラピーの手法を使い、子供たちの心理ケアを行う人材の育成を通じて、入植地政策から子供たちにかかるストレスの軽減や、コミュニティの抱える内的な問題の解決に取り組んでいきます。



パレスチナ年表

2012	イスラエル軍ガザ攻撃 国連がパレスチナを国家と認める。
2011	パレスチナ国連加盟申請、UNESCO承認
2008	イスラエル軍ガザ侵攻
2006	パレスチナ評議会選挙ハマス圧勝。レバノン戦争
2004	米大統領、大規模入植地容認。 ICJ 隔離壁撤去勧告
2003	米大統領、新中東和平案「ロードマップ」発表。
2002	イスラエル軍、パレスチナ難民キャンプ制圧。 ジェニンの虐殺／隔離壁着工（ヨルダン川西岸）
2000	イスラエル軍ヘブロン撤退合意（ヘブロン合意） キャンプ・デービッド和平交渉決裂 第二次インティファダ開始
1997	パレスチナ暫定自治協定（タバ合意）
1995	パレスチナ暫定自治協定（タバ合意）
1994	ヘブロン虐殺（パレスチナ人二十九人死亡） ガザ・エリコ先行自治開始
1993	パレスチナ暫定自治協定共同宣言調印 （オスロ合意）
1988	PLOイスラエルの生存権公式承認
1987	第一次インティファダ開始
1982	レバノン戦争／サブラ・シャティール虐殺事件
1978	キャンプ・デービッド合意
1973	第四次中東戦争
1969	アラファトPLO議長就任
1967	第三次中東戦争
1964	パレスチナ解放機構（PLO）設立
1956	第二次中東戦争
1948	第一次中東戦争 イスラエル建国宣言・パレスチナ難民発生
1947	国連パレスチナ分割決議案採択
1936	アラブ大蜂起
1929	「嘆きの壁」事件 ヘブロン虐殺（ユダヤ教徒六十七人死亡）

ワークショップ報告

ワークショップは、大きくふたつ分けて「ドラマ」と「子どもの権利、児童保護」の2つをテーマに実施されました。

ドラマ・ワークショップでは、「ウォーミングアップ」「コンセントレーション」「インターアクション」「クロージング」の四つに分類されたドラマ・ゲーム 50 種以上を実際に体験しながら学んでいきました。子どもたちの心に注目し、発話を促すアクティビティは、それぞれがどのような気持ちを喚起するか、どのような流れが作られるべきかを理解することが大切です。講師が参加者に向けて実際にアクティビティを指揮することで、子どもたちが自由に表現できる雰囲気をつくること、話すことや動くことをためらう子どもを励ます方法などを教えました。

子どもの権利、児童保護のワークショップでは、基本的なアイデアや各国のデータの紹介などに加え、参加者の職場で子どもの権利が守られていないシチュエーションや、それに対してできることについて、参加者が主体となったディスカッションが行われました。



講師陣紹介①

迅速、軽やか、短期的、効果的かつ明敏。それが Yes 4 Future プログラムです。11 ～ 18 名の参加者グループは、主に 3 つの職種に分けられます。教員、ソーシャル・ワーカー、NGO 団体の職員です。彼らは初めて、教室の中でするドラマ・ゲームやエクササイズのための集中研修に集まりました。ワークショップを通じて、グループは家族のようになり、コースが終了した後でもコミュニケーションが続いています。このプログラムは関係をつくり、友情をつくるプログラムでもあるのです。講師として、この考え方を大変嬉しく思います。実施方法も適切なものでしたし、その結果にも満足しています。参加者にはいつでもポジティブな結果をもたらす、最良のドラマ・エクササイズとゲームが提供されました。PB のサポートやオーガナイズ方法は素晴らしいものでした。PB との協力関係が今後も続いていくことを願っています。



ラエッド・シュウヒ
(Yes Theatre 俳優、ドラマティーチャー)

講師陣紹介②

教員はドラマ・ゲームを使うことを強く勧められます。なぜなら、教育カリキュラムをより簡単に教えることができるからです。ドラマはひとつのスタイルであり、取り組み方のひとつであり、その他の基礎的な方法論やセオリーと一緒にあって、より効果を発揮するものなのです。学習に必要な対話のきっかけを作ること、子どもたちが自分たちの住む世界の意義を見出すこと、これをサポートすることが教育文化の発展を企図した Yes 4 Future プログラムに参加した教育者の役割と言えます。ドラマ・エクササイズや即興劇は困難の認識、そして解決方法の発見、コミュニケーションと非言語メッセージの重要性についての理解を深めます。演じることや身体表現を通して、身体の統合を促し、感覚を磨くこともできます。教材は、演劇的に面白く魅力的にすることでよりシンプルになり、子どもたちが学ぶことの喜びを知ることができるのです。

ムハンマド・ティティ
(Yes Theatre 俳優、ドラマ・ティーチャー)



講師陣紹介③

Yes 4 Future プログラムはドラマ・ゲームのメソッドを活かし、コミュニケーション能力を向上させるための社会的なアクションと言えます。このプログラムでは、職業能力の育成だけではなく、パーソナリティーの伸長も重視されました。自信を持つことはどのようなキャリアを積むにしても重要です。Yes 4 Future で学ぶことのできる知識や技術、そして経験はあらゆる教育現場で価値があります。ドラマを学ぶことによって生徒や子どもたちはそれぞれの考え方を持って能力を伸ばし、新しいアイデアや異なる価値観、文化などにつづく窓を開け、立ち向かっていくことができるようになるのです。ドラマは批判的に捉え、創造的に考えるきっかけを与え子どもたち自身の文化を豊かにします。そして人生を愛し、より良いものを求め、否定的なものを肯定的に転換することができるのです。

イハップ・ザハッダ
(Yes Theatre 俳優、ドラマ・ティーチャー)

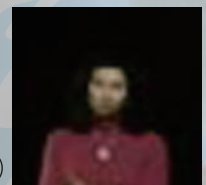


講師陣紹介④

ヘブロン市では 16 万人ものパレスチナ人と、入植者および兵士との緊張した関係性が続いています。この事実こそが子どもたちにとって困難な状況を作り出しており、教員やソーシャルワーカーがいかに重要な役割を持っているかを示しています。10 月までに 111 名の男女教育者がともに子どもの権利条約やパレスチナ子どもの権利法について学び、子どもと接する方法や、子どもの参画について考えていきました。何人かの参加者は子どもの権利条約がきちんと果たされることによって、より質の良い生活を子どもたちに提供できるのだという事実が大きく心を動かされていました。トレーニング後も多くの参加者が会場に残り、更に情報を求めてきました。

ドラマのワークショップとともに異なるタイプのトレーニングを受けることによって、参加者は子どもとより良く接することができます。このプログラム全体を通し、参加者は行政機能が働かない中でも個人や学校レベルで動けるということ、そして多くの団体や素材が活用できることを認識できたと確信しています。

ガーダ・アルーリ
(子どもの権利・児童保護専門家)



ドラマメソッド紹介①「鏡」

ドラマの手法を実施するために最も重要なのは、参加者が部屋の中で起こる出来事に集中することです。そのため、カリキュラムの中で紹介されるドラマ・ゲームの中でもコンセントレーション（集中）のアクティビティは比重が高いものになりました。「鏡」のアクティビティはコンセントレーションとインターアクション（相互交流）の間に位置するつなぎに当たります。参加者ふたりずつが向かい合って立ち、鏡と人の役を決めます。人は鏡に向かって動き、鏡はその動きを真似ていきます。相手は鏡なのでもちろん言葉を交わすことはありません。鏡の役は相手の動作を注意深く観察しながら、相手に合わせて動く必要があります。他方、人の役も相手にとって無理な動きが無いようにゆっくりと動いていきます。お互いの呼吸を意識的に合わせ、できるだけずれのない動きを目指します。相手と自分の身体の動きに集中することによって集中力を高めることにつながります。また、集中が最大限まで高まると、リラックスした状態で動きを相手にゆだねることができます。単純に集中を促すだけでなくそれを他者と共有することによって、信頼関係を構築することにもつながるドラマ・ゲームです。

ドラマメソッド紹介②「手紙」

部屋の前方に一脚の椅子を用意し、二つに折った白紙を置きます。演者となる一人が紙を見るリアクションから、観客となる人たちが何が書いてあるのかを当てるドラマ・ゲームです。演者はその間一言も発してはいけません。その他どんなリアクションを取るかは演者次第。怒りで紙を破り捨てる人もいれば、請求書の隠滅を図ろうとする人、ラブレターにうっとりする人など、様々です。演者には想像を膨らまして手紙の内容を考えること、また普段何気なく取っている感情の起伏と身体表現の関係を意識することが求められます。他方、観客は身体の動きや表情そして全体の文脈を観察し、感情を理解し内容を想像する必要があります。お互いの想像力を駆使して架空の空間を成り立たせる、ドラマならではの手法と言えます。演者は架空の設定の中であれば、どれだけ怒ったり泣いたりしても、とがめられたり中断されたりすることはありません。内に込めていた感情を人にも見えるように積極的に吐き出すことによって自浄効果を得るとともに、他者からの理解も得ることができるのです。本事業のカリキュラムの中ではインターアクションの分野の中に含まれます。感情のコントロールと自己表現のための重要なステップとなるドラマ・ゲームです。



実践フェーズ報告

一連のワークショップが修了した後、参加者が実際に子どもたちと一緒にドラマ・ゲームをする機会が設けられました。

参加者自身がファシリテーターとなって 10 ～ 15 人の子どもたちにルールを説明し、ゲームを指導しました。彼らはゲームを通じて子どもたちの表現や発話を受け止める役割も担います。参加者は日ごろから子どもに接する職業柄、注意をすることに慣れています。その一方で、ドラマ・ゲームが本来の自由な表現を促す目的から外れ、極端に強い指導にならないためには子どもたちの声を聞く特別な配慮が必要でした。

ワークショップ講師が監督をし、実践にあたってのアドバイスや、安全上の注意、ゲームの雰囲気作りなどで参加者をサポートしました。実施するドラマ・ゲームは、ワークショップの中で紹介されたものが中心ですが、時には参加者自身が工夫をし、新しいルールや材料を追加しました。

その中でも優れたものは、ワークショップの材料としても取り入れられ、他の参加者とも広く共有されています。講師とともにワークショップで得られた知識・技術を掘り下げ、実際に職場で実施するための重要な準備ステップとなりました。



ワークショップ参加者

ワークショップには総勢 111 名が参加しました。

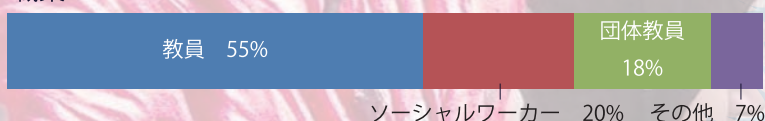
10 ～ 15 名程度が 1 つのグループとなり 9 回のワークショップをともに受講しました。ヘブロン行政区内の地方部、市街地、そして閉鎖されている旧市街地、難民キャンプなどを含め計 63 校、7 団体からの参加がありました。現地の教育当局や団体を通じて希望者を募り、職種や年齢、地理上の多様性を念頭にグループ分けが行われ、職場や家庭の外で新たな人々と出会い、交流する機会となりました。

参加者内訳

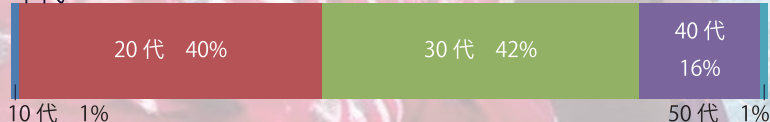
性別



職業



年代



参加者の声①

私のドラマに関わる経験はこのプログラムを通じて始まりました。そこでの経験は、能力ばかりで無く、私自身を向上させることに役立ちました。ドラマの方法によって、生徒たちの学ぶ意欲を向上させ、思考し、黙想し、話し合うことの理論的な意義を見出させることができました。生徒たちは役柄とのインターアクションを通じて、彼ら自身の感情やエネルギーを存分に使い、時に友人の助けを借りながら、押し付けられることなく自分で答えを見つけ出すことができるのです。この方法はグループの中でのコミュニケーション、交渉や話し合いを推進します。生徒たちの関心や能力が満たされ、また遊びの空間の中で様々な感覚を使う機会となりました。生徒たちは受動的になるのではなく、積極的な参加者となって自信を持つようになります。Yes Theatre と PB、そして日本の人々の、たくさんの人に微笑をとどけるたゆまない働きに感謝します。

ユーセフ・ティティ

(参加者、アシャヒード・ファウド・アル・カワスミ学校教員)

参加者の声②

ドラマには大きな教育的役割があり、学校のカリキュラムにも取り入れるべきものです。手の動き、顔の表情など、身体で表現することは必要なスキルです。たとえば生徒たちが交通警察官や車、通行人を演じるとすれば、それは実際の生活にも活かされるでしょう。その子どもたちは、音楽の授業で誰にも教わることなく役割を分けて動くことができたのです。私たちはこのプログラムでドラマの研修機会を与えられ、このような結果を認識できたのです。学校で生徒たちと行うドラマ・ゲームは、これまでの一方的な教育方法とは違う、新しいカラーを加え、教室の中の多くの問題を解決しました。私にとっても生徒たちと会うことが面白くなり、彼らのことを理解しやすくなりました。これらは講師やスタッフのスキルが素晴らしいということです。また他の研修機会学び、得られた情報を活かして生徒たちと効果的にコミュニケーションをとれることを楽しみにしています。

ラシュディヤ・アブ・ハディード
(参加者、ウィダッド公立学校、アル・ウクワ公立学校ソーシャルワーカー)

参加者の声③

私たちの生きる時代は、広い分野での創造性と生産性に加え、個々人がそれぞれ時代のニーズに沿った能力や技術を手にすることが求められます。そのためにも、教育にドラマを取り入れることが重要なのです。私たちは倦怠感を払拭することに成功し、生徒たちとのコミュニケーションプロセスを作ることができました。また教材をより面白い方法でつかい、生徒の選択、改新、向上する潜在能力を発見することもできました。生活のあらゆる場面で思考するスキルに加え、彼らの学習能力を向上させるには、それぞれの思考レベルを引き上げ、学んだことを維持させ、より多くの発見をさせ、その関係性をつなぐ鍵を見つける手助けが必要です。

封鎖にも関わらずパレスチナを支援してくださる日本の方に感謝します。パレスチナ人が必要とするものを得られるように、このプログラムの発展コースが設立されることを期待します。また体験の共有や相互訪問を通じて日本の学校との姉妹校締結などを行い、二つの国の関係性が強まることを願っています。

イナーム・マハームラ
(参加者、アル・エスラ初等学校校長)

資料収集

ワークショップ修了後の情報提供場所をつくるため、書籍やマルチメディア資料の収集を行いました。ドラマ・エデュケーション、児童心理学、児童保護、子どもの権利に関する専門書に加え、教員向けの指南書や、教室で使えるマテリアル集などを購入。ワークショップ後に参加者の各職場で実践するにあたり、それぞれが工夫し発展させていくことが目的です。アラビア語圏ではドラマ・エデュケーションの普及率が低いこともあり、書籍資料も多くありません。専門家や複数の書籍専門店を回ることによって、既存の文学資料などに約260冊の教育資料が加わり閲覧公開が可能になりました。図書管理には積極的に申し出てくれた現地のボランティアが当たっています。こうした子どもたちのケアに関わる分野の自発的な取り組みが既に始まっています。

今後の展望

1年目の事業では、地域の教育者が子どもの心理面へのサポートができるように意識喚起をすること、人づくりとしての教育を具体的な方法で行うことを広くアピールすることができました。ワークショップは簡単なドラマ・ゲームの紹介が中心でしたが、今後ストーリーテリングやロールプレイなどを通じた自己表現を促す発展的な内容が追加されます。また、心理ケアを必要とする子どもたちに確実に支援を届けるためには、より強い足場作りをすることが必要です。具体的には、教育カリキュラムへの組み込み、および教員間での技術共有の仕組みづくりなどです。今年度の事業実施にあたって、参加者への声かけやイベントのオブザーブなど、さまざまな面で現地教育当局の協力を得ることができました。今後は教育当局との定期的なミーティングを設け、公教育の現場でのドラマ・エデュケーションの実施の可能性を探っていきます。加えて、ドラマといえば大衆娯楽といった、教育とかけはなれたイメージが強い中では保護者などへの意識喚起も欠かせません。公開レクチャーをはじめ多様な方法で地元社会へ協力を呼び掛けていきます。

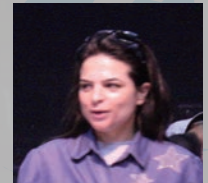


現地スタッフコメント

パレスチナの教育システムは非常に大きく、今回私たちはさらにドラマという新しいキーワードを取り入れることに成功しました。これを達成するためには限られた時間内で大変な努力を要しました。PB と Yes Theatre によるこの取り組みはパレスチナの教育システムの向上と次世代の育成のために重要だと考えています。実際に教師、子ども、ソーシャルワーカー、学校、家庭、NGO などに働きかけたことで、このプロジェクトへの反応は予想以上に素晴らしいものとなりました。

私にとって PB とともに仕事をするのは大変楽しいことです。PB の現地スタッフの今村さんは親切で理解があり働き者の代名詞のような素晴らしいパートナーです。彼女を通じて日本人をさらに知る機会を得ることを嬉しく思います。

ルバ・ジャッダ
(現地プログラム調整員)

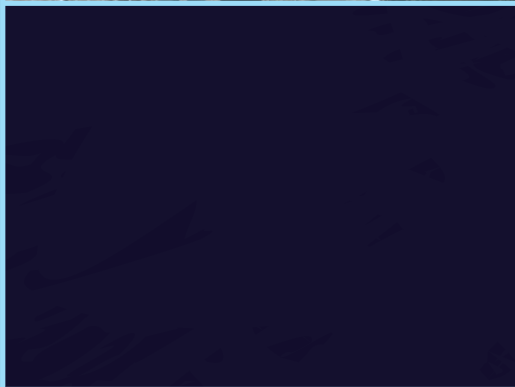
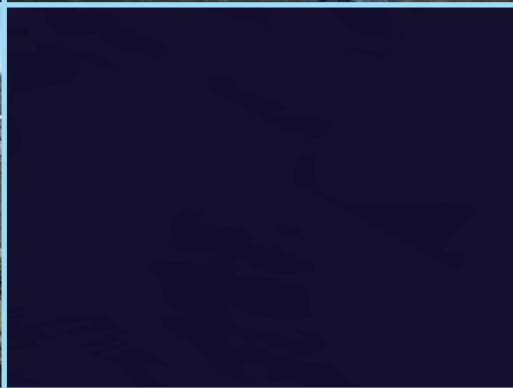
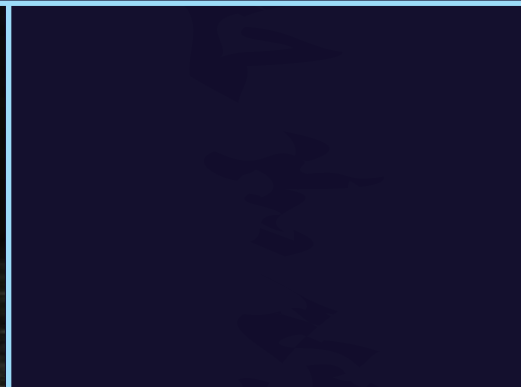
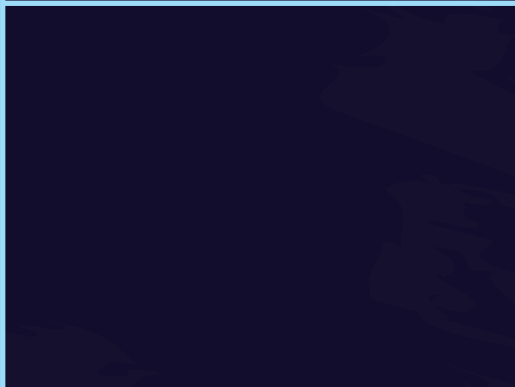


PB 現地担当者コメント

事業も終盤となった 11 月中旬、8 日間に渡るガザ攻撃がありました。西岸地区南部に位置する事業地へブロンではデモンストレーションに参加していた若者が 1 名亡くなりました。「またか」と思われた方も少なくなかったのではないかと思います。パレスチナ人の同僚も「ただだ」と言いました。他方、成長過程の子どもたちにとっては一日ごとが新しく記憶に刻まれていきます。何度も繰り返されているように思える出来事を新鮮に受け止め、考えられる力をつけること、どんな形の将来を描きたいか想像力をつけること。高度に政治的な問題に直面しているパレスチナでは、当事者の底力をつけることが必要と考え、この事業が始まりました。その中でもドラマという創造的な方法を持って取り組めることをとても嬉しく思います。サポートしてくださる日本の皆様、そして意義を理解し積極的に関わってくれるパレスチナの皆様を含めてこの事業が成り立っています。多くの方の支えに感謝するとともに、これからを想像していくわくわくした気持ちを皆様に共有していただきたいと思います。

今村沙絵
(ピースビルダーズ プログラムコーディネーター)





特定非営利活動法人
ピースビルダーズ
〒730-0041 広島市中区小町 1-20
TEL : 082-247-0643
E-mail : office@peacebuilders.jp
Web : <http://www.peacebuilders.jp/>